復活祭主日礼拝説教 「もう泣かない」

日本基督教団石神井教会　2020年4月12日イースター

【福音書日課】ヨハネによる福音書　20章1～18節

1週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。
そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。2そこで、シモン・ペトロのと
ころへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行
って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているの
か、わたしたちには分かりません。」3そこで、ペトロとそのもう一人の弟子
は、外に出て墓へ行った。4二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、
ペトロより速く走って、先に墓に着いた。5身をかがめて中をのぞくと、亜麻
布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。6続いて、シモン・ペ
トロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。7イエスの頭を
包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあっ
た。8それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。
9イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉
を、二人はまだ理解していなかったのである。10それから、この弟子たちは
家に帰って行った。

11マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を
見ると、12イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見
えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。13天使たちが、「婦
人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取
り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」14
こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。し
かし、それがイエスだとは分からなかった。15イエスは言われた。「婦人よ、
なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って
言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教え
てください。わたしが、あの方を引き取ります。」16イエスが、「マリア」
と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先
生」という意味である。17イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよ
しなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのとこ
ろへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である
方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは
上る』と。」18マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは
主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

「なぜ泣いているのか？」

イースターおめでとうございます。何よりも、この日、礼拝堂においでいただけず、それぞれのご家庭でイースターを迎えられた皆さんに、心から主のご復活をお祝い申し上げます。ネットのライブ配信でこの礼拝に加わってくださっている方が大勢いらっしゃることと思います。一方で、そのような機器を利用できずに一人静かに聖書を開き、祈りをささげていらっしゃる方も少なくないことでしょう。この日の礼拝のためにと、平日のうちに教会をお訪ねくださったり、郵便を利用して献金などをお預けくださった方が、たくさんいらっしゃいました。この祝いの日をご一緒に迎えることを、どれほど心待ちにしてくださっていたことかと思います。

イースターのご挨拶を、閑散とした礼拝堂で、カメラと画面を通して、皆さんと交わすことになるとは、数週間まで思いも寄りませんでした。もちろん、この礼拝堂に、わたしのほかは誰もいない、というわけではありません。最低限の奉仕者には、この礼拝が教会の営みとして整えられるために、おいでいただいています。けれども、イースターの祝いを、これほど寂しい礼拝堂で迎えることがあろうとは、思ってもみませんでした。愛餐の食事を伴う祝会を行うのは無理だろうと、早くに見切りをつけていました。聖餐の執行はどうにかしたいと、安全な陪餐方法も検討いたしました。礼拝の進め方の細かい見直しもしました。それでも、先主日、教会役員会は、このイースターから皆さんには各家庭で主日の礼拝をしていただくように徹底することを、決断したのです。「日曜日は、家にとどまってください」と。

何よりも残念なのは、この喜びの祝いの日に、こどもたちを迎えられなかったことです。毎年イースターには、特別な祝いをこどもたちと共にしてきました。こどもたちにとっても、わたしたちにとっても、イースターエッグは、決して「ただのゆで卵」ではなかったはずです。

このイースターを目指して、洗礼を志願し、準備を始めてくださっていた方もありました。けれども、この混乱の中、準備は進まず、先週予定していた試問会、そしてこの日の洗礼式、いずれも延期することになっています。もっとも、たとえ、準備が進んでいたとしても、皆さんの集まることのない礼拝堂で洗礼式を執行するというわけにはいかなかったでしょう。洗礼によって、わたしたちはキリストの死と復活の命にあずかって、キリストと結ばれることを信じています。それは、何よりも「キリストの体」とたとえられる教会共同体にかたく結び合わされる経験を通して、確信を与えられていくことです。「キリストの体」である教会の群れができるだけ多く集められているところでこそ、洗礼式は、受洗者にとって確かなものとなるのです。

それでも敢えてこの日、閑散とした礼拝堂に洗礼志願者を迎えて洗礼式を執行するとなったら、志願者は、どのような思いを抱かれたでしょうか。ここに、自分が結ばれるはずのキリストの存在を、確かめることができたでしょうか。キリストの姿を見出せず、悲しみに暮れることになったのではないでしょうか。

イエスの体の置いてあったところ

主イエスのご復活の日、朝早くから墓を訪ねていたマグダラのマリアは、悲しみに暮れていました。泣いていました。墓の入口から石は取り除けられ、大きく開け放たれているのに、その中に、置かれているはずの主イエスのご遺体が見当たらなかったからです。マリアは、弟子たちのところに行って、訴えました。

「**主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません**」。

イースターの朝、主イエスの御体のあるはずのところに、わたしたちは集まって来るはずでした。ここです。洗礼によって主イエスに結ばれた者として共に生きてきたわたしたちが、主の日ごとに集められ、互いの姿の中に、今も生きて共にいてくださるキリストのお姿を見てきた礼拝堂です。ここで、わたしたちは、イースターの朝、いつにも増して確かなお姿を現してくださるキリストと相見えたいと願ってきました。「キリストの体」の肢とされた多くの者が集められたところで、わたしたちは、キリストの御体の確かに生きていらっしゃることを共に喜び、この御体に新たに加えられる洗礼志願者を、迎えようとしていました。

今、わたしは初めて、マリアの泣く理由が分かった気がしています。マリアは、ただ愛する主イエスが死んでしまわれたことを嘆き、せめてそのご遺体に縋ろうとしたのに、それができなかったので泣いた、というだけのことではなかったのでしょう。キリストの御体を見出したい思いで訪ねたところに、それを見出せなかったのです。空っぽだったのです。それは、日曜日の昼、誰もいない教会堂に一人残されたときに襲ってくる、あの空しさ、寂しさ、悲しみと、どこか同じものなのではないか。わたしは、そう思わされています。

けれども、今、わたしはまた、新たな思いをも与えられているのです。たとえここに皆さんがいらっしゃれなくても、それが続くとしても、わたしはなお、ここに立ち続けようと思います。「キリストの御体」の肢としてここに集まってきてくださっていた皆さんがいらっしゃれず、石神井教会という「キリストの体」が見えなくなったとしても、ここには、確かに主の日ごとに立ち現われる「キリストの御体」があったのです。そこに、わたしは立ち続けようと思うのです。あの、マリアが見た「**白い衣を着た二人の天使**」のようになって。

二人の天使は、主**イエスの遺体の置いてあった所**に座る者でした。**一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた**のです。主イエスのご遺体（ソーマ＝体）がそこにあったことを指し示すように、そのことを証しするように、二人の天使は、そこに座り、主イエスの御体を探し訪ねてきたマリアを迎えたのです。

今日、ここに共に集うことができずに、それぞれの場所に散らされて過ごしている皆さんは、確かに、石神井教会という「キリストの御体」として、ここに主の日ごとに集められていました。今日、この閑散とした教会堂に、キリストとお会いすることを願って来られる方があったならば、わたしは、その方をお迎えいたしましょう。キリストの肢々である皆さんが、確かにここで「キリストの御体」として歩まれてきたことを、その頭から足先のことまで、お話ししたいのです。

「わたしは主を見ました」

いいえ、そのことを、今、わたしは、皆さんにこそお話ししたいのです。皆さんの前でこそ、あの白い衣を着た天使の役割を果たしたいのです。それぞれの場所に置かれて、もしかすると一人で涙を流さないではいられない思いの中で、この日を過ごされているかもしれない、皆さんの前で。そして、皆さんに、今日こそ、もう一度あらためて、「**わたしは主を見ました**」と、ご復活の主イエスを見出していただきたいのです。

イースターの朝、マリアは、一人でした。ほかの福音書は、この朝に主イエスの葬られた墓を訪ねたのは「婦人たち」であったと伝えていますが、ヨハネ福音書は、マリアが一人であったように物語っています。たとえ誰かと連れ立っていたとしても、マリアの心は、独りぼっちだったのでしょう。

男の弟子たちは、主イエスが葬られているはずの墓に行くことはせず、家にとどまっていました。マリアも、他の女たちと共に、墓で用事を済ませたら、家に戻って、そこにとどまるつもりだったかもしれません。「死んだ主イエスのご遺体」を確かめて満足すれば、マリアも、そうしたことでしょう。

けれども、マリアは、その朝、「死んだ主イエスのご遺体」はもう無いのだという現実を突きつけられました。自分の拠り所としようとしてきた「死んだ主イエスのご遺体」は、もう無いのです。

主イエスは、死なれました。十字架で死なれました。「死んだ体」となられて、主イエスは、墓に葬られました。しかし、「死んだ体」に何の意味があるでしょうか。「生きた体」にこそ、意味があるのです。「生きた体」にこそ、人に働きかけ、変化させ、成長させる力があるのです。「死んだ体」は、そこが「墓」であること、もはや生きた働きをしないことしか、示さないのです。

主イエスは、それゆえに、よみがえられました。「死んだ体」のままではなく、「生きた体」としてご復活なさいました。もはや、「死んだ体」をマリアが求めないために、「死んだ体」は取り去られたのです。

キリストの教会は、このイースターを迎えるまでの受難節に、世界中で、「死んだ体」として晒されたのでしょう。教会は、本当に生きているのか。「キリストの御体」としての命を、本当に豊かに育んでいるのか。実は、死んでいるのではないか。すでに死に始めているのに、「これが自分たちのキリストの御体です」と、すがりついていたのではないか。そう問われたのではないでしょうか。

けれども、わたしたちがしがみついていた古い「死んだ体」は、取り去られました。今こそ、主イエスは、新しい御体を「生きた体」として現わしてくださるはずです。塩漬けにされた「キリストの御体」ではなく、生きてお働きになる「キリストの御体」として、わたしたちは、新たによみがえらされるのです。

マリアは、もはや一人でいることはありません。弟子たちのもとに帰って行きました。彼らと共にいるためです。彼らと共に、再び、生きた主の御体を見る者とされるためです。

「**わたしは主を見ました**」。そうです、「わたしも主を見ています」。